日坂宿

藤文

萬屋

交通＝藤文・萬屋まで

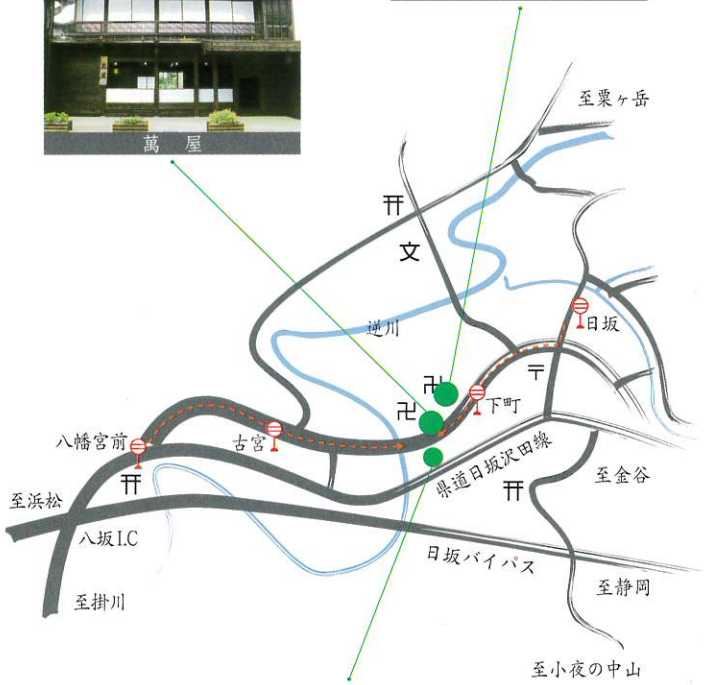
JR掛川駅北口から
バス東山線で「八幡宮前」「日坂」下車、
徒歩5分
※掛川駅北口に向かうときは
「下町」「古宮」バス停からも
ご乗車いただけます

東名高速道路「掛川I.C.」より、
車で約15分

掛川・日坂バイパス「八坂I.C.」より、
車で約5分

藤　文

萬　屋



川坂屋

藤文・萬屋

▶お問い合わせは◀

掛川市役所商業観光課
〒436-8650 静岡県掛川市長谷1丁目1-1 TEL.0537(21)1149

「藤文」…日坂宿最後の問屋役を務めた伊藤文七郎。

商家で屋号は藤文。

伊藤文七(号は文陰)翁は安政三年(一八五六)に日坂宿年寄役となり、万延元年(一八六〇)から慶應三年(一八六七)にかけて日坂宿最後の問屋役を務めました。維新後の明治四年(一八七一)には、日坂宿他二十七ヶ村の副戸長に任ぜられました。

その間、幕府の長州征討に五十両を献金、明治維新の時は官軍の進発費として二百両を寄付しております。

明治四年(一八七一)の郵便制度開始と同時に郵便取扱所を自宅・藤文に開設、取扱役(局長)に任ぜられました。日本最初の郵便局の一つと云われています。

その孫、伊藤文一郎氏は明治三七年(一九〇四)から三九年(一九〇六)、大正六年(一九一七)から八年(一九一九)、昭和三年(一九二八)と三期にわたり日坂村村長を務め、当時珍しいガソリン式消防ポンプを村に、世界一周旅行記念として大地球儀を小学校に寄贈するなど村の発展や村民の国際意識啓発に尽力しました。

明治九年(一八七六)十一月には照憲皇太后、翌十年(一八七七)二月には英照皇太后が日坂宿後通過の時、ここで御休憩なされました。

この建物は藤文部分が江戸末期、かえで屋部分が明治初期に建てられたもので、修復された蔵は当時何棟かあったと云われているうちの一棟です。

この土地・家屋は平成十年(一九九八)に文陰の曾孫伊藤奈良子さんの遺志により掛川市に寄贈されました。

文久二年(一八六二)の宿内軒並取調書上帳では今の伊藤家は藤文・かえで屋に分かれておりました。

江戸末期の姿を今にとどめ街道を行き交う旅人の心を偲ばせる庶民旅籠
日坂宿「萬屋」

江戸時代末期の庶民旅籠

建設時期は建物に見られる特徴や壁の下張りの和紙に書かれていた『安政三年丙辰正月』よりみて、安政年間と思われます。当宿の「川坂屋」(筋向かい)が十分格の宿泊もできた大旅籠であったのに対して、「萬屋」は日頃、庶民の旅人が利用した旅籠でした。

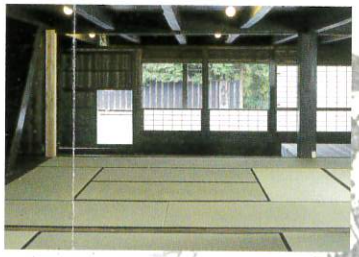
表の蔀戸(しとみど)は当時の一般的な店舗建物の仕様であり、昼間は障子戸、夜間は板戸の様は、日坂宿では昭和二十年代まで数多く見られました。

萬屋の建物

日坂宿、旧旅籠「萬屋」は間口が四間半(約8.2m)であり、幕末としては中規模の旅籠です。一階が「みせ」や「帳場」で、二階が宿泊室というごく普通の構えです。天保十二年(一八四〇)の宿場図に既に「萬屋」として記入されていますし、文久二年(一八六二)の古文書では下記のように記されています。

歌川広重　東海道五拾三次之内・日坂
佐夜ノ中山(保永堂版)(掛川市二の丸美術館蔵)

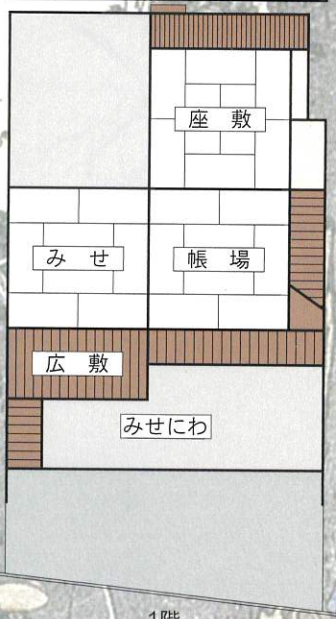
2階「座敷」



「帳場」

「みせにわ」

2階



1階

文久二年(一八六二)の「宿内軒並取調書上帳」による萬屋の記録

間口四間半
畳三拾三畳旅籠屋
板鋪　六畳嘉七
奥行七間半
惣畳数〆
三拾九畳
惣坪数〆
三拾三坪七分五厘

日坂宿は嘉永年間に大火災にあい、この「萬屋」の土間下からも当時の焼土がみられ、それを裏付けています。この事と建物内部の柱が、差鴨居の多用によって、かなり省略されている点等から考慮して、嘉永から安政に掛けて建築された建物と思われます。

修理建物のうち、正面側から奥行き四間は建築当初と判断できますが、背面側の二間半は使用材からみて、明治以後に建て直されたと思われます。二階は現在は正面側の二室を利用していますが、当初はその奥の二室も同様に使用していた痕跡があり、又、階段位置も現状と異なっていました。

当時、一階はすべて板間で、事ある時のみ畳を敷いたと思われ、一階に通り土間がない事、二階正面の出格子が掃き出しで格子戸がなく、建ちの低い手摺のみで開放的である事等が、一味異なった構えの旅籠です。